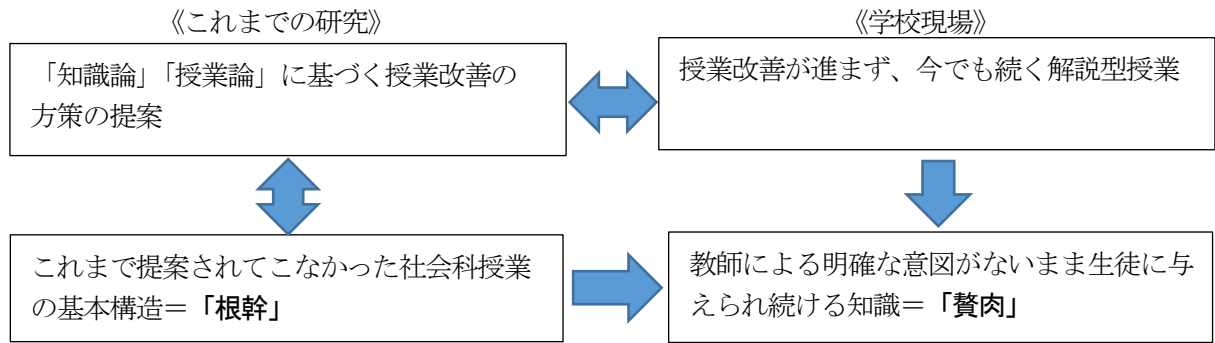


【歴史的分野研究発表】

社会科授業の「根幹」と「贅肉」  
 ～見方・考え方を「根幹」とした歴史的分野の授業～  
 ～1635年の海外渡航、帰国の禁止をめぐって～

山口県岩国市立灘中学校 教諭 井村真規

1 社会科授業の「根幹」と「贅肉」



授業改善が進まない現状を打開するためには、社会科授業の「根幹」を明らかにすることが必要

2 社会科における「学力」

(1) 社会科授業の「根幹」としての要件

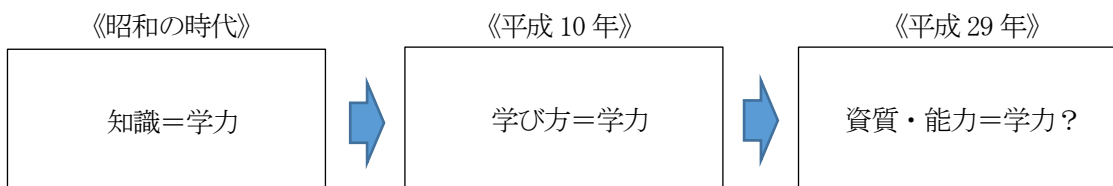
社会科として身に付けさせるべき「学力」が、授業を通して自然と習得されていく構造となっていること



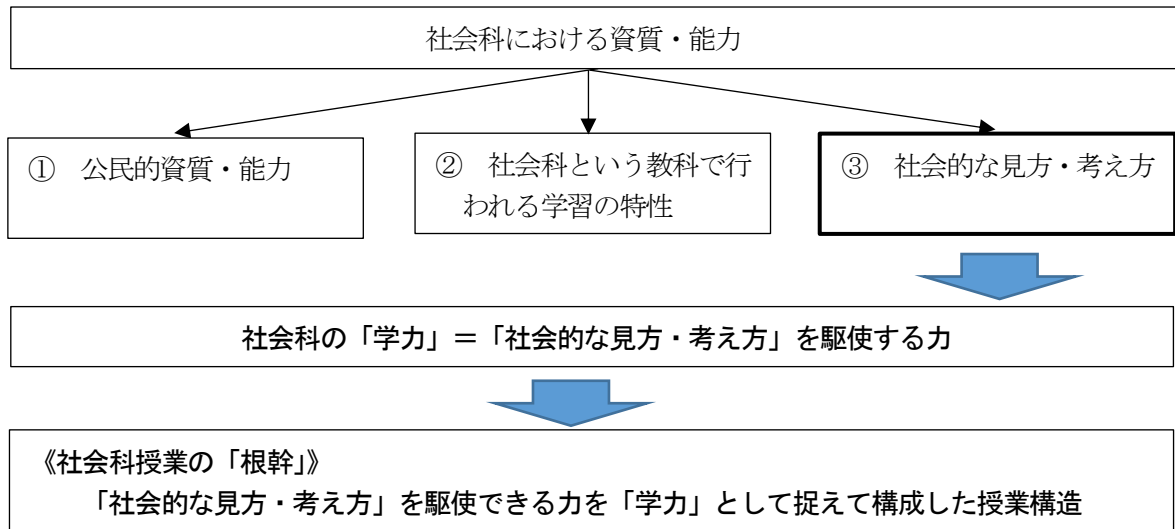
社会科の「学力」とは何か？

(2) 「育てたい学力」の変遷

学習指導要領改訂	育てたい学力	多くの国民が考える学力
昭和	「知識」の量	「知識」の量？
平成元年	新しい学力観	
平成10年	「知識」より「学び方」	
平成20年	知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等のバランス	
平成29年	「資質・能力」 ・知識及び技能 ・思考力・判断力・表現力等 ・学びに向かう力、人間性等	



(3) 社会科における「学力」を明らかにするために



① 「公民的資質・能力」

- ・ 広く自らの個性を伸長、発揮しつつ文化と福祉の向上、発展に貢献する能力
  - ・ 平和で民主的な社会生活の実現、進展に向けて主体的に協力、参加する態度
  - ・ 物心両面に渡る豊かな社会生活を築こうとする自主的な精神
  - ・ 真理と平和を希求する人間としての在り方生き方の自覚
  - ・ 個人を尊重し、各人の個性を尊重しつつ、自己の人格の完成に向かおうとする実践的意欲
  - ・ 社会についての広く深い理解力と健全な批判力に基づく政治的教養
  - ・ 現代社会について探究しようとする意欲や態度
- (『小学校学習指導要領解説社会編』、『高等学校学習指導要領解説公民編』を参考に作成)

② 社会科という教科で行われる学習の特性

- ・ 一つの地域や社会の成り立ちを学ぶ学習
- ・ 形成された地域や社会の生活が維持される仕組みを学ぶ学習
- ・ その地域や社会において発生する問題を見出し、その解決のための方策を考える学習

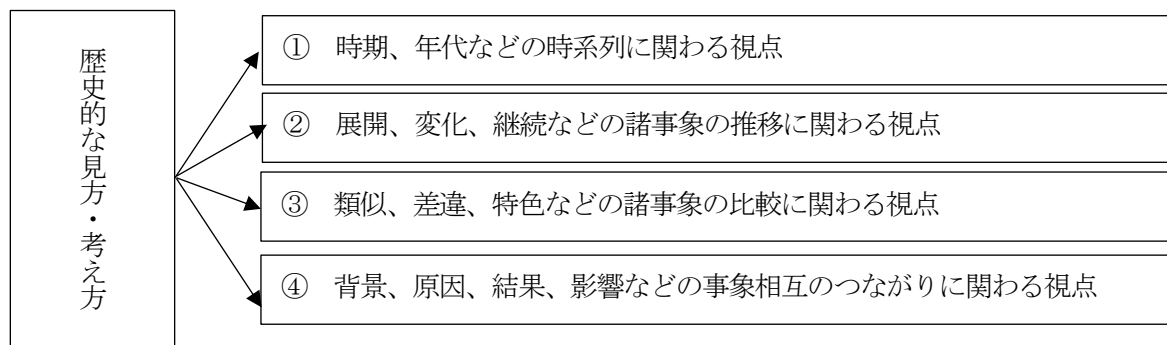
③ 社会的な見方・考え方

今次改訂により、地理、歴史、公民の分野ごとの独自性や特性が強調され、具体性が示される。

地理的分野	歴史的分野	公民的分野
地理的な見方・考え方	歴史的な見方・考え方	現代社会の見方・考え方
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 位置や分布</li> <li>・ 場所</li> <li>・ 人間と自然環境の相互関係</li> <li>・ 空間的相互関係</li> <li>・ 地域</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 時系列 (時期、年代)</li> <li>・ 推移 (展開、変化、継続)</li> <li>・ 比較 (類似、差違、特色)</li> <li>・ 事象相互のつながり (背景、原因、結果、影響)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対立と合意、効率と公正</li> <li>・ 分業と交換、希少性</li> <li>・ 個人の尊重と法の支配、民主主義</li> </ul>

### 3 歴史的な見方・考え方

#### (1) 『中学校学習指導要領解説社会編』に整理された4つの「見方・考え方」



#### (2) 今回提案する歴史的な見方・考え方

歴史的な見方・考え方	具体的な視点
① 時期、年代などの時系列に関わる視点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いつおこったか。</li> <li>・いつの時代におこったか。</li> <li>・いつの年代におこったか。</li> <li>・どのような時期におこったか。</li> <li>・どのような順番でおこったか。</li> <li>・なぜそのタイミングでおこったか。</li> <li>・おこったのはその時期で良かったのか。</li> <li>・その時期におこったことに必然性はあったのか。</li> </ul>
② 展開、変化、継続などの諸事象の推移に関わる視点	<p>《展開》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どこでおこったか。</li> <li>・どこが中心となったのか。</li> <li>・どこに広がったか。</li> <li>・どこまで広がったのか。</li> <li>・どのようなところに広がったか。</li> <li>・誰が中心となったのか。</li> <li>・何がどのような順序で行われていったのか。</li> <li>・誰が賛成し、誰が反対したのか。</li> <li>・そのねらいはどのように説明され、理解されたのか。</li> <li>・成功の要因は何か、失敗の要因は何か。</li> </ul> <p>《変化》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どのように変化したのか。</li> <li>・変化のスピードは遅いか、速いか。</li> <li>・変化がおこった時期には何があったのか。</li> <li>・変化をおこしたのは何か。</li> <li>・変化は本当にあったのか。</li> <li>・変化が見られなくなった時期はいつか。またその理由は何か。</li> </ul> <p>《継続》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いつまで見られたのか。(見られなくなったのはいつか。)</li> <li>・見られなくなったのはなぜか。</li> <li>・本当に見られなくなったのか。</li> </ul>

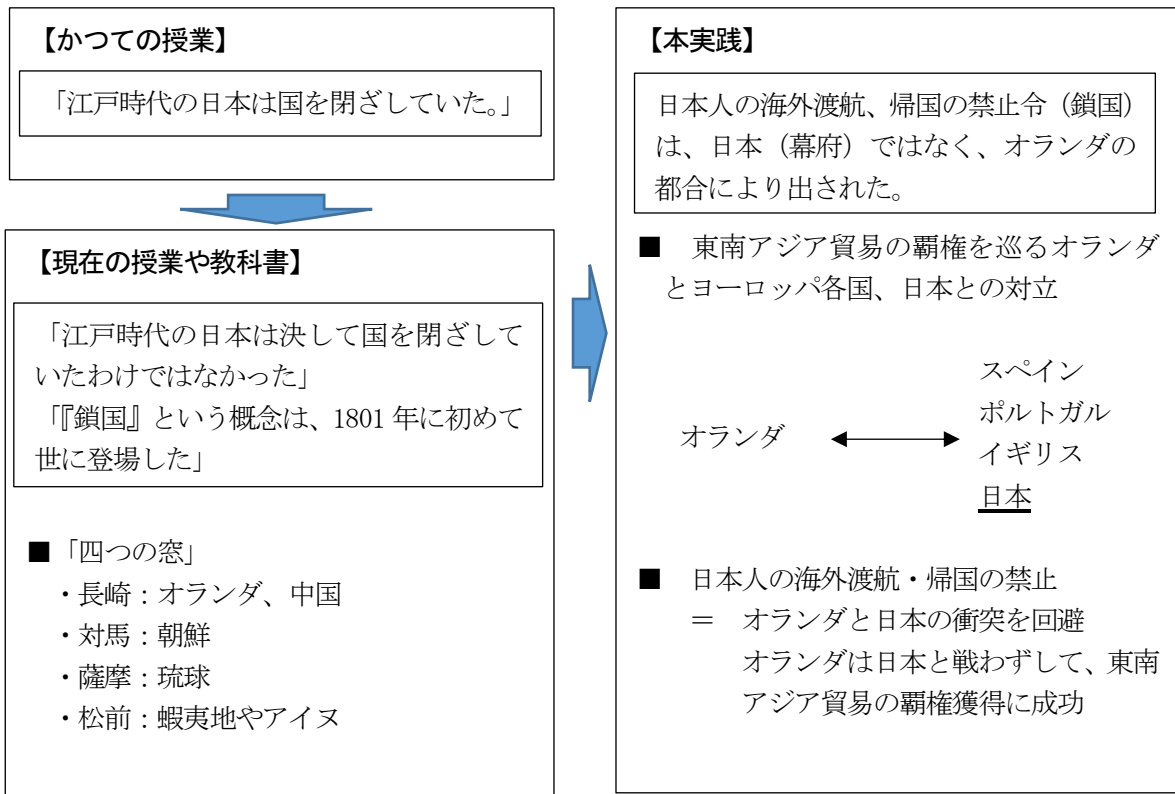
<p>③ 類似、差違、特色などの諸事象の比較に関わる視点</p>	<p>《類似》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・類似の事象は何か。またその理由は何か。</li> <li>・これまでの（他の）事象との共通点は何か。</li> <li>・これまでの事象と本当に異なっているのか。</li> </ul> <p>《差違》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・他の事象とどのようなちがいがああるか。</li> <li>・これまでの事象と本当に異なっているのか。</li> <li>・どうしてそのようなちがいがああるのか。</li> </ul> <p>《特色》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような特色がああるのか。</li> <li>・その特色は他の事象でも見られるのか。</li> <li>・その特色に大きな影響を与えているものは何か。</li> </ul>
<p>④ 背景、原因、結果、影響などの事象相互のつながりに関わる視点</p>	<p>《背景》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それは、どのような背景のもとでおこったか。</li> </ul> <p>《原因》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・誰がおこしたか。</li> <li>・起こしたのは一人か、複数か。（特定の人物か、不特定多数の人物か）</li> <li>・どうしておこったか。</li> </ul> <p>《結果》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような結果をもたらしたのか。</li> <li>・結果はだれによってもたらされたのか。</li> </ul> <p>《影響》</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それはどのような影響を与えたか。</li> <li>・影響を受けたのは誰（どこ）か。影響を受けなかったのは誰（どこ）か。</li> <li>・影響はいつまで続いたか。（影響がなくなったのはいつか。）</li> <li>・影響がなくなったのはなぜか。</li> <li>・得をしたのは誰か、得をしなかった（損した）のは誰か。</li> </ul>

(3) 考察する事象の特性に応じて活用する「見方・考え方」の組み合わせのパターン (例)

	I 基本形	II 時代を特色付ける中心的な事象の考察	III どのような時代にも見られたり、時代をまたいで成立したりする事象の考察
見方・考え方	① いつおこったか	① どのような時期におこったか	① 何を背景にしていたのか
	② どこでおこったか	② 誰が中心になっていたか	② どうしてその時期になったのか
	③ 誰がおこしたか	③ どこまで広まったのか	③ どのように変化したか
	④ なぜおこったか	④ なぜうまくいったのか	④ いつまで続いたのか。
	⑤ どのような影響を与えたか。	⑤ 似たような出来事に何がああるか	⑤ ○○の事象と何が違うか
		⑥ そのことは、後世にどのような影響を与えたのか	⑥ そのことは、後世にどのような影響を与えたのか

#### 4 本実践（社会科授業の根幹を「見方・考え方」として位置付けた歴史的分野の授業）

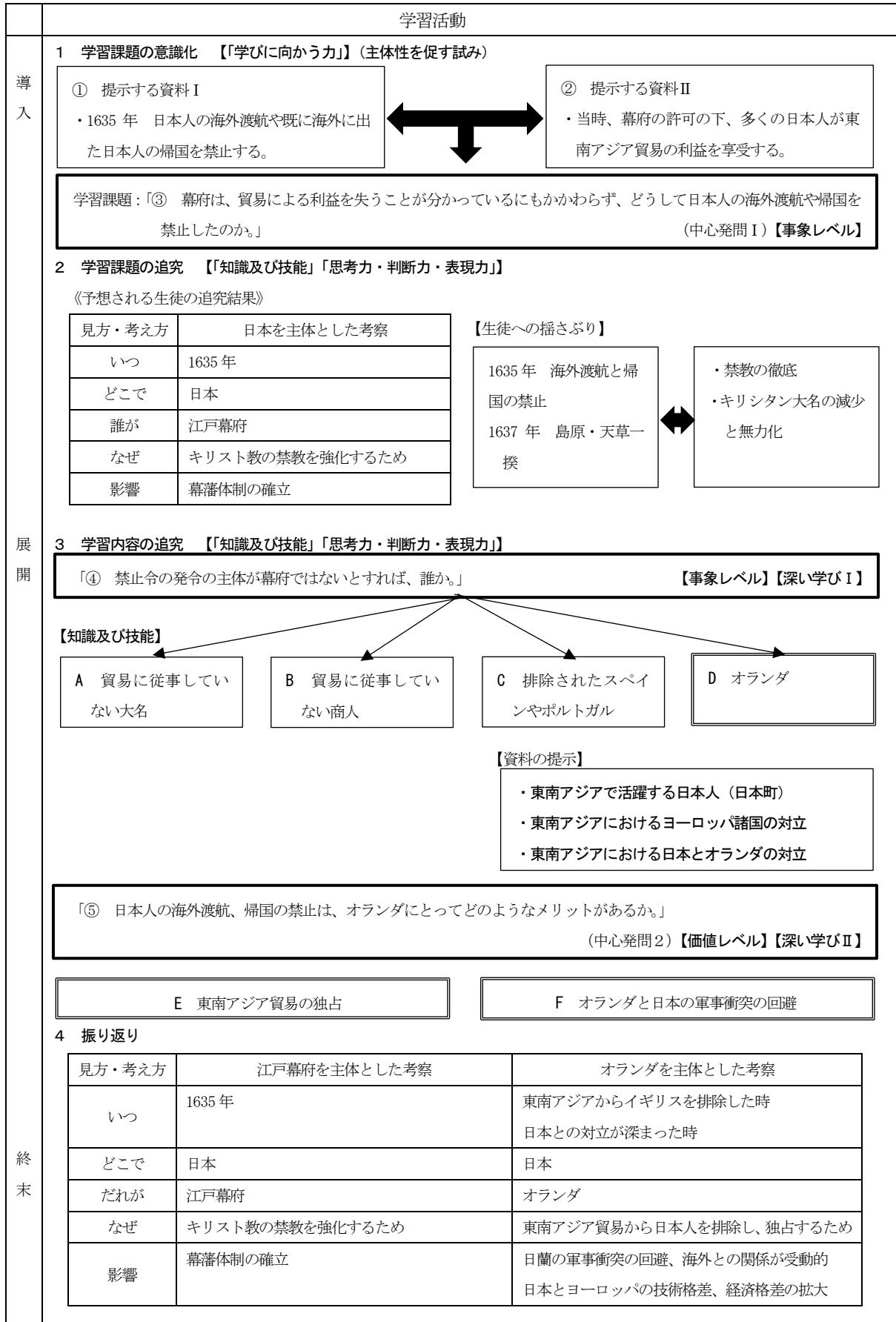
##### （1）本実践で扱う「日本人の海外渡航、帰国の禁止令」（鎖国）について



##### （2）「見方・考え方」の5つの視点から分析した「日本人の海外渡航、帰国の禁止令」

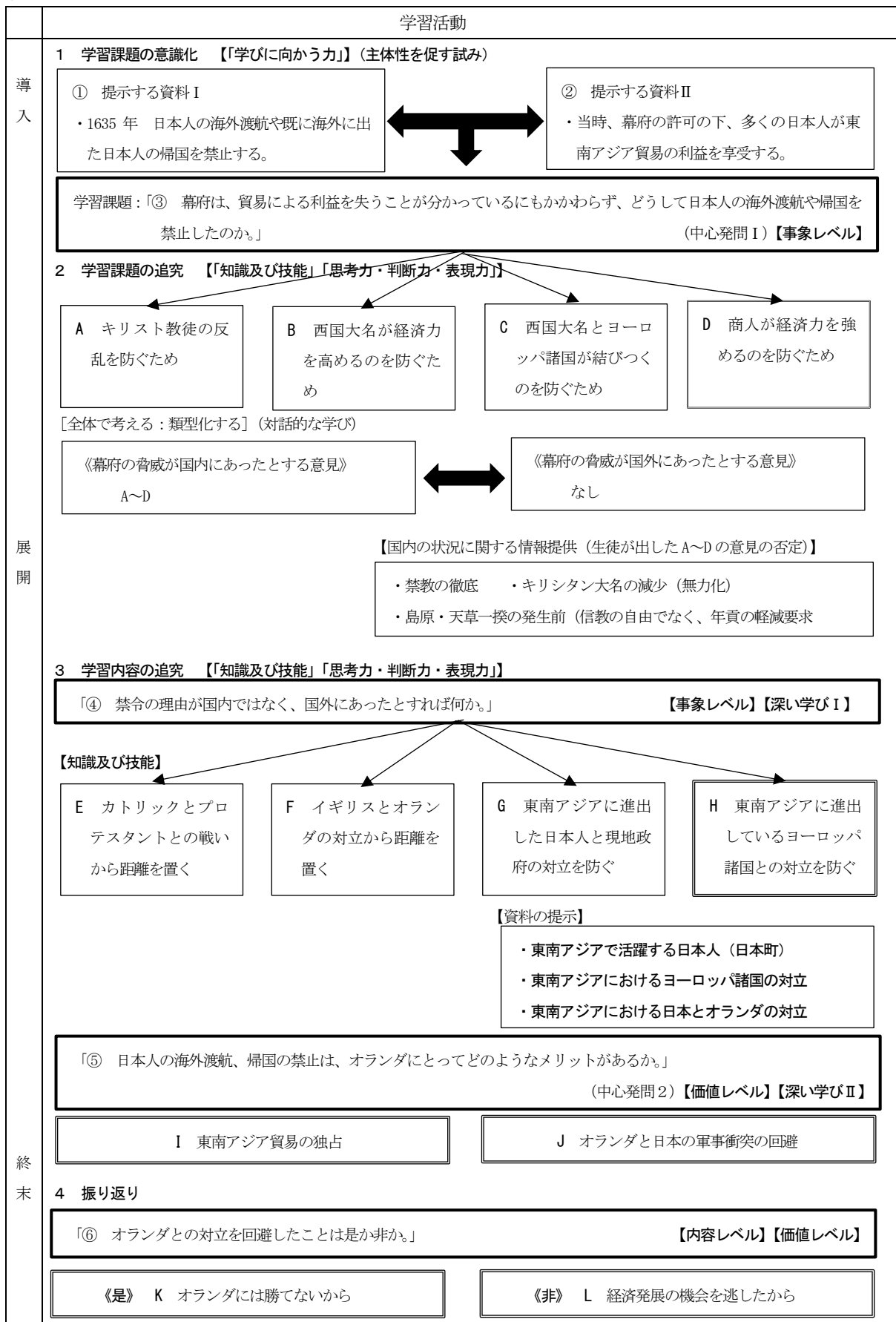
見方・考え方	江戸幕府を主体とした考察	オランダを主体とした考察
いつ	1635年	東南アジアからイギリスを排除した時 日本との対立が深まった時
どこで	日本	日本
だれが	江戸幕府	オランダ
なぜ	キリスト教の禁教を強化するため	東南アジア貿易から日本人を排除し、独占するため
影響	幕藩体制の確立	日蘭の軍事衝突の回避、海外との関係が受動的 日本とヨーロッパの技術格差、経済格差の拡大

(3) 見方・考え方を「根幹」とした「日本人の海外渡航、帰国の禁止令」の授業構造図【活用する段階】

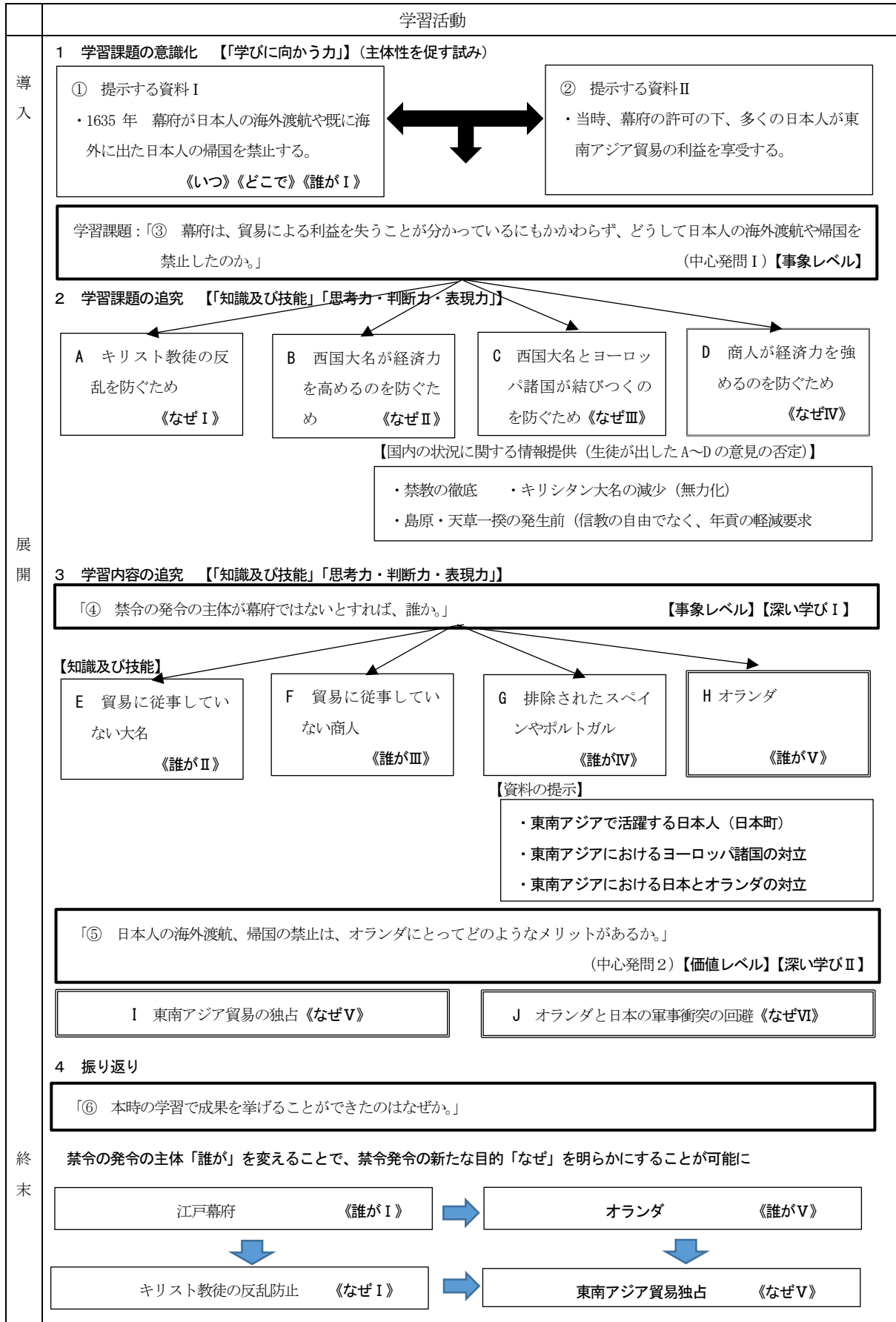


(4) 平成 18 年度全中社山口大会で山口県中社研が提案した授業構造に基づく「日本人の海外渡航、帰国の禁止令」の授業構造

図

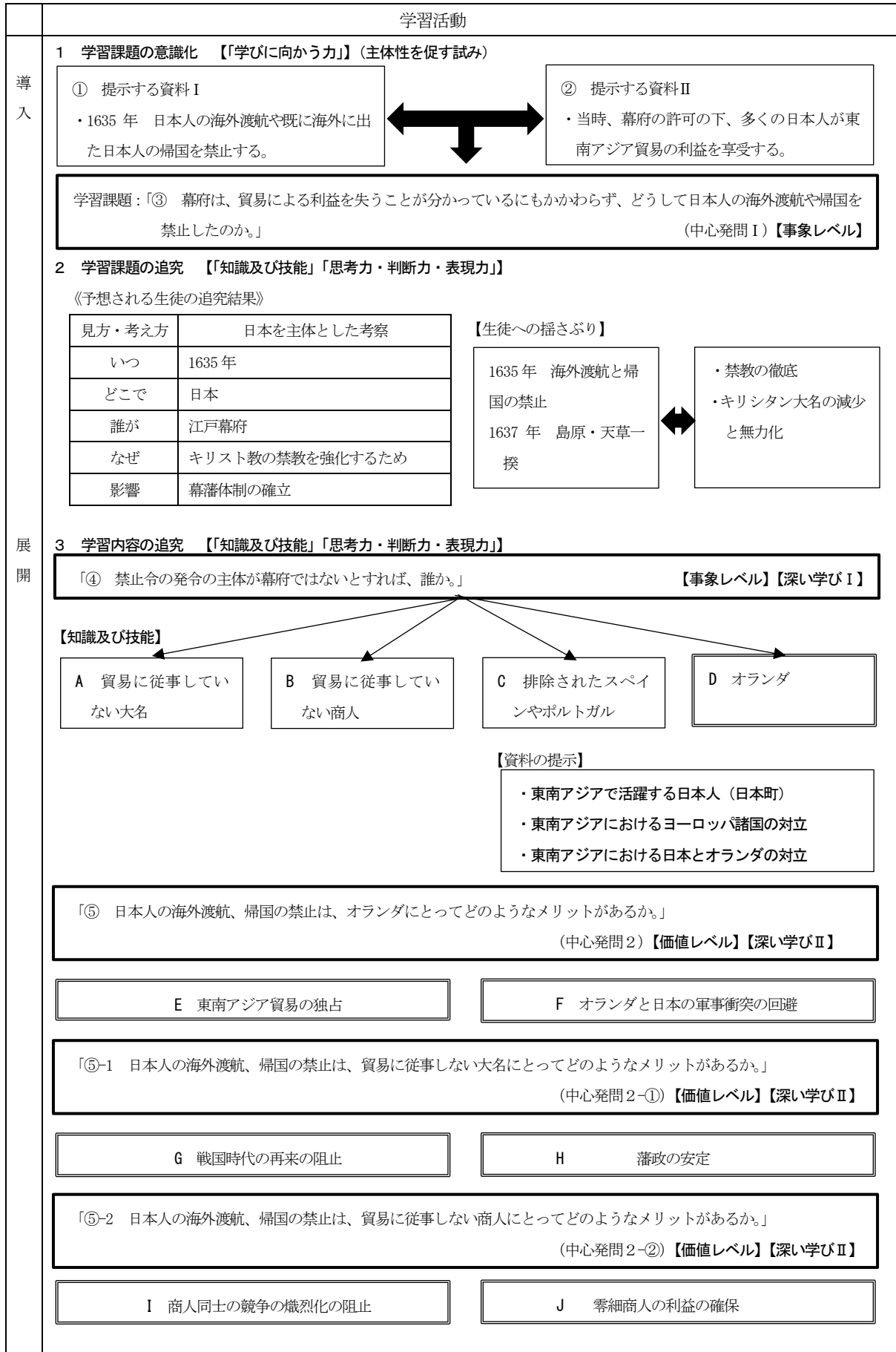


(5) 見方・考え方を「根幹」とした「日本人の海外渡航、帰国の禁止令」の授業構造図【獲得する段階】





(6) 見方・考え方を「根幹」とした「日本人の海外渡航、帰国の禁止令」の授業構造図【提案する段階】



「⑤-3 日本人の海外渡航、帰国の禁止は、スペイン、ポルトガルにとってどのようなメリットがあるか。」

(中心発問2-③)【価値レベル】【深い学びⅡ】

K 東南アジア貿易を巡る競争の緩和

L オランダによる日本侵略の阻止

「⑤-4 日本人の海外渡航、帰国の禁止は江戸幕府にとってどのようなメリットがあるか。」

(中心発問2-④)【価値レベル】【深い学びⅡ】

M 西国大名の経済力の高まりの阻止

N 東南アジアの現地政府と日本野衝突の回避

4 振り返り

	江戸幕府を主体とした考察	貿易に従事しない大名を主体とした考察	貿易に従事しない商人を主体とした考察	スペイン、ポルトガルを主体とした考察	オランダを主体とした考察
いつ	幕藩体制の確立を進めていた時	泰平の世が確立されつつあった時	国内で商工業が発展しつつあった時	スペイン、ポルトガルのアジアでの覇権に陰りが見られた時	東南アジアからイギリスを排除した時 日本との対立が深まった時
どこで	日本	日本	日本	日本	東南アジア
誰か	江戸幕府	貿易に従事しない大名	貿易に従事しない商人	スペイン、ポルトガル	オランダ
なぜか	西国大名の経済力の高まりを防ぐため 東南アジアの現地政府と日本の衝突を回避するため	貿易により経済力を強めた大名が幕府や他の藩に対して反乱をおこし、戦国時代が再来するのを防ぐため	貿易により経済力を強めた商人の影響が高まり、自分たちの利益が奪われるのを防ぐため	オランダなどの他のヨーロッパ諸国が日本を侵略する可能性を防ぐため	東南アジア貿易から日本人を排除し、独占するため
影響	幕藩体制の確立 日蘭の軍事衝突の回避	戦国時代の再来の阻止	国内商業の発展	日本の独立の維持	日蘭の軍事衝突の回避 日本とヨーロッパの技術格差、経済格差の拡大

終末

## 第2学年社会科（歴史的分野）学習指導案（本時案）

1 題材名 日本人の海外渡航、帰国の禁止

2 主眼 日本人の海外渡航、帰国の禁止令が出された理由を考察することを通して、鎖国が行われた理由やその影響を、17世紀の東南アジアにおける日本とオランダとの対立との関係から理解することができる。

3 本時設定の意図

(1) 本教材について

本時で扱う「日本人の海外渡航、帰国の禁止令」（禁令）は、1635年に江戸幕府により発令された一連の鎖国令の一つである。この禁令は、当時幕府が警戒していたキリスト教勢力の拡大や、貿易による西国大名の経済力の高まりを阻止するために発令されたとするのが一般的な解釈であるが、幕府がこの禁令を発令するに至るまでには、オランダによる強い説得があったとも言われている。

17世紀初めに東南アジアに進出したオランダは、その後、この地域での貿易の覇権を巡って対立していたスペイン、ポルトガル、そしてイギリスの排除に成功する。そして残る競争相手国である日本との対立を深めていく。当時、東南アジアでは各所に日本町が建設されるほど、日本人の東南アジアへの進出がさかんで、オランダと日本との間では、東南アジアの物産の入手を巡って激しい競争が繰り広げられていた。そして、その多くの場合において日本人商人が優位に立っていたと言われている。日本人の海外渡航、帰国の禁止令はこのような状況の中で発令された。この禁令により、オランダは日本との軍事衝突を回避し、戦わずして東南アジア貿易の覇権を握ることに成功した。この禁令は、オランダにとって意義のある出来事であった。

(2) 生徒について

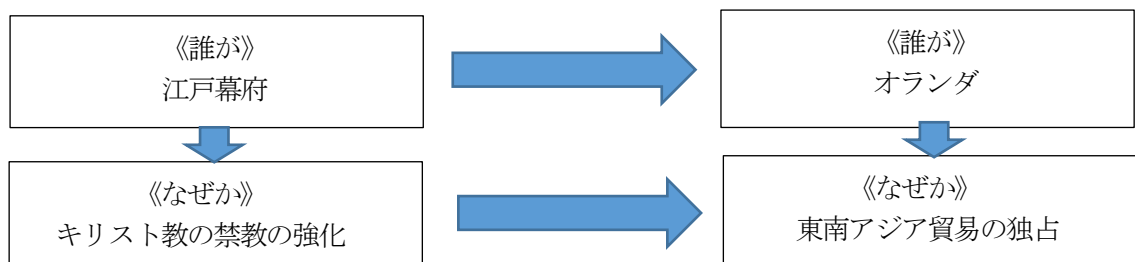
本時は、生徒に5つの「見方・考え方」を活用して、日本人の海外渡航、帰国の禁止令が出された要因を考察させるが、その際、予想される生徒の結論は次の通りである。

見方・考え方	日本を主体とした考察
いつ	1635年
どこで	日本
誰が	江戸幕府
なぜ	キリスト教禁教を強化するため
影響	幕藩体制の確立

生徒は、これまでも「見方・考え方」を活用して学習課題を考察する活動をしているが、現時点では、このように教科書に書かれた内容を書き写すことにとどまるのではないかと考えられる。

(3) 指導にあたって

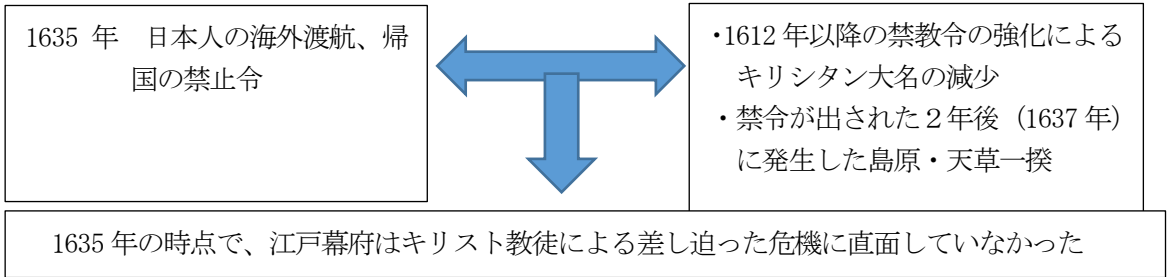
本時の主眼を達成するためには、この禁令を江戸幕府だけでなく、オランダの立場から考察させなければならないが、それは見方・考え方の「誰が」を、生徒が考える江戸幕府からオランダに置き換えて考察させることで可能となる。



この「誰が」を置き換えての考察を、教師による一方的な説明や指示で生徒にさせたのでは意味がない。生徒の思考を揺さぶりながら、この禁令の発令の主体が江戸幕府ではない可能性に生徒に気付かせた上で、考察させていくことが重要である。そのために、次の過程を設定する。

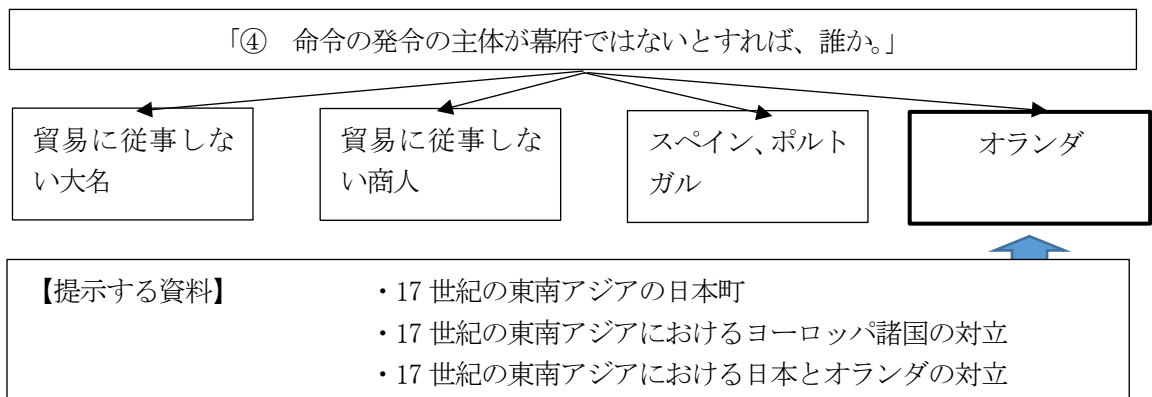
① 生徒が考える「なぜか」-「キリスト教の禁教を強化するため」の否定

「江戸幕府が命令を出した」という「誰が」の否定は、生徒の「なぜか」に対する答え、つまり「キリスト教の禁教を強化するため」を否定することで可能となる。具体的には次の事実を提示し、生徒に禁令が出された 1635 年の時点では、江戸幕府はキリスト教徒による差し迫った危機に直面していなかった可能性があることに気付かせる。



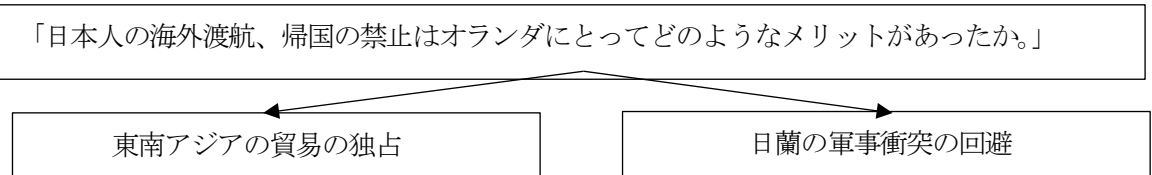
② 江戸幕府以外で可能性がある禁令の発令の主体の考察

禁令の発令の主体が江戸幕府ではない可能性を明らかにしたら、新たな発令の主体、「誰か」を考察させる。その候補として、貿易に従事しない大名や商人、オランダ等が考えられるが、最終的にはオランダに注目させる。そのために行うのが、17世紀の東南アジア情勢に関する資料を提示である。



これらの資料から、東南アジア貿易の覇権を巡り、イギリスを排除したオランダは、貿易において優位に立っていた日本との直接対決に踏み切るか否かの状況にまで来ていたこと、そして日本人の海外渡航、帰国の禁止令は、このような状況下で出されたことが明らかになる。

③ 禁令の発令の主体「誰が」をオランダに置き換えての考察



この禁令により、日本が東南アジア貿易から手を引くことになった結果、オランダは、日本と直接対決をせずして東南アジア貿易の覇権の獲得に成功したことを明らかにすることができる。以上の学習過程を通して、最終的に生徒の鎖国に対する認識は、次のように変化することが期待できる。

見方・考え方	江戸幕府を主体とした考察	オランダを主体とした考察
いつ	1635年	東南アジアからイギリスを追い出した時 東南アジア貿易を巡って日本との対立が深まった時
どこで	日本	日本
誰が	江戸幕府	オランダ
なぜ	キリスト教の禁教を強化するため	東南アジア貿易から日本人を排除し、独占するため
影響	幕藩体制の確立	日蘭の軍事衝突の回避 海外との関係が受動的 日本とヨーロッパの技術格差、経済格差の拡大

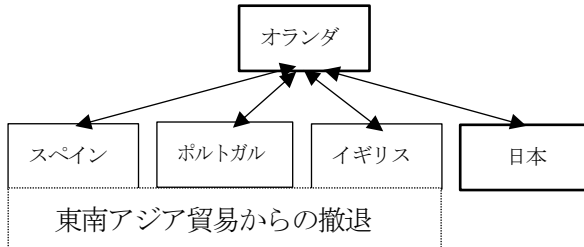
学習活動・学習内容	主な教師の働きかけ												
<p>1 学習課題の意識化</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>1635年に日本人の海外渡航、帰国を全面的に禁止</p> </div> <div style="font-size: 2em; color: blue;">↔</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 30%;"> <p>当時、幕府の許可の下、多くの日本人が東南アジア貿易の利益を享受</p> </div> </div> <p>2 学習課題の追究</p> <p>【課題の追究に伴う学習活動】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 日本人の海外渡航、帰国令が出された要因を、『歴史的な見方・考え方』の5つの視点を活用して考察する。</li> <li>■ 日本人の海外渡航、帰国令の発令の主体を江戸幕府とする立場から考察する。</li> </ul>	<p>① 1635年に江戸幕府により発令された、日本人の海外渡航、帰国の禁止令（禁令）を提示する。</p> <p>② 当時、江戸幕府の許可の下、多くの商人が東南アジア貿易の利益を享受していたことを確認する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>「③ 貿易による利益を失うことが分かっているにもかかわらず、どうして江戸幕府は、日本人の海外渡航、帰国を禁止したのか。」 (中心発問Ⅰ)</p> </div>												
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <thead> <tr> <th style="width: 20%;">見方・考え方</th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>① いつ</td> <td></td> </tr> <tr> <td>② どこで</td> <td></td> </tr> <tr> <td>③ だれが</td> <td></td> </tr> <tr> <td>④ なぜか</td> <td></td> </tr> <tr> <td>⑤ 影響は</td> <td></td> </tr> </tbody> </table> <p>・「キリスト教の禁教の強化」という「③なぜか」に対する結論の検証</p>	見方・考え方		① いつ		② どこで		③ だれが		④ なぜか		⑤ 影響は		<p>「③-1 (キリスト教に関連する) これらの事実についてどう思うか。」</p>
見方・考え方													
① いつ													
② どこで													
③ だれが													
④ なぜか													
⑤ 影響は													

予想される生徒の反応	教師の対応
<p>① 次の意見を発表する。 ア これは、小学校の鎖国の授業で学習した。</p> <p>② 次の疑問を抱く。 イ 禁令が出されると、日本は貿易による利益を失ってしまうのではないか。</p> <p>③ 「歴史的な見方・考え方」の5つの視点から学習課題を考察する。  <b>《①「いつ」》</b> ウ 1635年  <b>《②「どこで」》</b> エ 日本  <b>《③「誰が」》</b> オ 江戸幕府  <b>《④「なぜか」》</b> カ キリスト教の禁教を強化するため キ 西国大名が経済力を強めるのを防ぐため ク 西国大名とヨーロッパ諸国が結びつくことを防ぐため ケ 商人が経済力を強めるのを防ぐため  <b>《⑤「影響は」》</b> コ 幕藩体制の確立</p> <p>③ー1 次の意見を発表する。 サ 禁令が出された1635年の時点では、島原・天草一揆はまだおこっていなかった。 シ 当時の幕府はキリスト教に対してそれほど</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>1612年 禁教令（その後、段階的に禁教を徹底） →キリシタン大名の減少、無力化</p> <p>1635年 日本人の海外渡航、帰国の禁止令</p> <p>1637年 島原・天草一揆（キリスト教徒による反乱）</p> </div>	<p>○ この禁令の条文を生徒と共に確認する。</p> <p>○ 東南アジアの日本町の分布図を提示し、朝鮮出兵以降、多くの日本人が貿易のために東南アジアに進出していたことを確認する。</p> <p>○ 「なぜか」に対する複数の結論の中で、最も可能性が高いものはどれか考えさせる。</p> <p>○ 討論の中で明らかになるそれぞれの結論に対する根拠を整理する。</p> <p><b>《キリスト教の禁教強化》</b> ・キリスト教徒の反乱である島原・天草一揆が江戸幕府に与えた動揺の大きさ</p> <p><b>《西国大名の経済力の高まりの阻止》</b> ・西国大名の多数を占める外様は、関ヶ原の戦い後も幕府（徳川氏）に対する反抗心を持ち続けている可能性があること</p> <p><b>《西国大名とヨーロッパ諸国の結び付きの阻止》</b> ・西国大名（外様）は、倒幕のためなら、いかなる手段も辞さない可能性があること</p> <p><b>《商人の経済力の高まりの阻止》</b> ・経済力をつけることで、商人の幕府に対する影響力が高まる可能性があること</p> <p>○ 最終的に生徒は、「キリスト教の禁教強化」という目的を支持することが予想される。そこで、次の事実を提示して、この意見が否定される可能性を示唆する。</p> <p>○ 討論の結果、多くの生徒が「キリスト教の禁教の強化」を目的とする意見を支持することが予想される。そこでこの意見を否定するために、次の事実を提示する。 ・1612年以降の禁教令の強化により、キリシタン大名は国内から一掃されたこと ・島原・天草一揆は1637年に発生したこと</p> <p>○ 1635年の時点では、江戸幕府はキリスト教徒による差し迫った危機に直面していなかった可能性が高いことを示唆する。</p>

### 3 学習内容の追究

#### ■ 命令の発令の主体 (④「だれが」) をオランダとする立場からの考察

- ・17世紀前半における東南アジア貿易の覇権を巡る対立



脅威を感じていなかったのか。

ス 禁令を出した目的は、西国大名や商人が経済力を強めることを防ぐことだったのかもしれない。

#### ④ 江戸幕府以外の命令の発令の主体として次の候補を挙げる。

##### 《貿易に従事していない大名》

セ 藩政が安定しつつある中で、多くの大名は、戦国時代の再来を望んでいない。

##### 《貿易に従事していない商人》

ソ 貿易で経済力を強めている商人をそのままにすれば、自分たちは競争に敗れ、商売をすることができなくなってしまう。

##### 《排除されたスペイン、ポルトガル》

タ 自分たちを排除した日本が、貿易により利益を挙げさせたくない。

##### 《オランダ》

チ 「鎖国中、ヨーロッパ諸国の中で唯一日本との貿易が認められたのがオランダである。

「④ 命令の発令の主体が江戸幕府でなければ、誰か。」

- 生徒が禁令を出した他の目的として考える「西国大名や商人の経済力の高まりを阻止するため」という意見を否定するために、次の事実を提示する。

##### 〈西国大名の経済力の高まりの阻止〉

- ・1615年の武家諸法度発令以降、大名統制が強化されていたこと

##### 〈商人の経済力の高まりの阻止〉

- ・当時、商人が貿易に従事するためには幕府の許可が必要だったこと（幕府はいつでも商人に与えた許可を取り消すことができたこと）

- 禁令の発令の主体（「③だれが」）が、江戸幕府ではない可能性を示唆する。

- 生徒が意見を表出しない場合は、左記の「予想される生徒の反応」を参考に教師が提示し、どの可能性が高いか考えさせる。

##### 《貿易に従事しない大名（諸藩）》

- ・泰平の世が築かれつつある中で、経済力を強めた西国大名が天下統一を目指して、幕府や諸藩対して軍事行動を起こすと、戦国時代に戻ってしまう可能性がある。

##### 《貿易に従事しない商人》

- ・貿易により成長した商人との競争が本格化するのには時間の問題である。競争を避けるためには、貿易をやめさせなければならない。

##### 《排除されたスペイン、ポルトガル》

- ・自分たちを排除した日本に、東南アジア貿易で利益を獲得させたくない。

##### 《オランダ》

- 最終的には、オランダに注目させるために、17世紀の東南アジアで繰り広げられていた貿易の覇権争いに関する次の資料を提示する。

- ・東南アジアで活躍する日本人商人

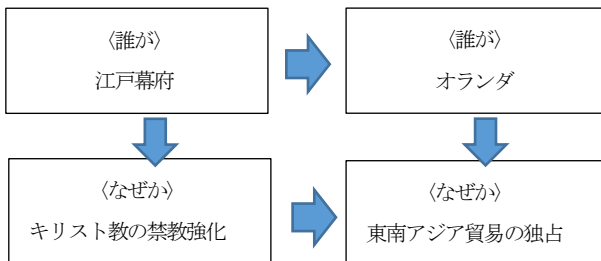
- ・東南アジアにおけるヨーロッパ諸国の対立
  - ・東南アジアにおける日本とオランダの対立
- この禁令が出された背景には、オランダによる江戸幕府への働きかけがあったことを確認する。

見方・考え方	オランダを主体とした考察
① いつ	東南アジアからイギリスの排除に成功した時 日本との対立が深まった時
② どこで	日本
③ だれが	オランダ
④ なぜか	東南アジア貿易の独占
⑤ 影響は	日蘭の軍事衝突の回避 海外との関係が受動的 日本とヨーロッパの技術格差、 経済格差の拡大

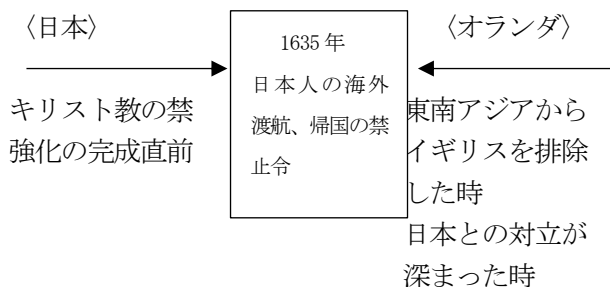
「⑤ 日本人の海外渡航、帰国の禁止は、オランダにとってどのようなメリットがあるか。」  
(中心発問Ⅱ)

#### 4 振り返り

- 「だれが」を変えることで新たな「なぜ」を打ち出すことができる可能性



- 禁令がこのタイミングでだされた要因



「⑥ 本時の学習で最も有効だった『見方・考え方』はどの視点か。」



⑤ 次の意見を発表する。

- ツ オランダは東南アジア貿易を独占することができた。
- テ オランダは日本との軍事衝突を回避することができた。

⑥ 有効だった見方・考え方を発表する。

《③「誰が」》

- ナ 「だれが」を幕府からオランダに置き換えたことで、日本とオランダが東南アジアで貿易を巡って対立していたことが分かった。

《④「なぜか」》

- ニ 「なぜか」を検証することで、江戸幕府以外の者が禁令を出した可能性に気付くことができた。

- 生徒が意見を表出できない場合は、先に示した資料を参考にして、17世紀に東南アジアで日本とオランダが対立していた要因を確認させる。
- オランダと日本が軍事衝突をした場合に、どちらが戦況を有利に進める可能性があるか問かける。
- おそらく「オランダが有利」と考える意見が多数を占めると思われる。そこで「日本が有利」と考える以下の理由を提示し、生徒に意見を求める。
  - ・世界有数の金銀の埋蔵量を誇っていたこと
  - ・優れた技術力を持つ日本の手工業者
  - ・イギリス、ポルトガルが味方についてくれる可能性
- 「見方・考え方」の「③だれが」を変えることで、新たな解釈を打ち出せることを再度確認する。
- 本時の場合、「いつ」については、禁令が出された1635年という西暦ではなく、「なぜこのタイミングで禁令が出されたのか」を考察することで、当時の時代背景がより明らかになることを確認する。
- 影響とは、時間の経過により明らかになるものであり、今後の学習によって明らかにされていくことを確認する。

## 5 本実践の考察

本実践において中心となる活動は、次の通りである。

### オランダにとっての日本人の海外渡航、帰国の禁止令の発令の意義についての考察

以下、実際の授業で生徒がどのような過程を経て、日本人の海外渡航、帰国の禁止令の発令の意義をオランダの立場から明らかにしたかを説明する。

#### (1) 東南アジアにおけるオランダと日本の対立を明らかにする段階

禁令の発令の意義をオランダの立場から明らかにするためには、まずは、禁令が出される直前、東南アジアではオランダが日本と対立を深めていたことを明らかにしなければならない。そこで本実践で行ったのが、次の2つの資料の考察である。

#### 《資料1》17世紀の東南アジアの日本町、日本人居住地の分布図

##### 《読み取ることができる内容》

- ・インドシナ半島には、日本町が5つある。(ツーラン、フェフォ、プノンペン、ピニャールー、アユタヤ)、日本人居住地が1つある。(サイゴン)
- ・マレー半島に日本人居住地が5つある。(ベチャブリ、リゴール、シンゴラ、パタニ、マラッカ)
- ・ルソン島に日本町が2つある。(サンミゲル、ディラオ)
- ・台湾に日本人居住地が2つある。(基隆、淡水)
- ・スマトラ島に日本人居住地が2つある。(ジャンビ、トゥルクブトゥン)
- ・ジャワ島に日本人居住地が2つある。(ハンダム、バタヴィア)



17 世紀に多くの日本人が東南アジアの広範囲に進出し、活発に貿易を行っていた。

= 新たに獲得した知識及び技能①

### 《資料 2》17 世紀の東南アジア情勢

#### 《読み取ることができる内容》

- ・オランダはスペイン、ポルトガル、イギリスとの戦いに次々に勝利し、モルッカ諸島や台湾の占領に成功した。
- ・オランダとイギリスは対立関係にあったが、ポルトガル宣教師（商人）を乗せていたことを理由に、日本の貿易船を取り押さえ、幕府に連行するなど、対日本においては協力関係にあった。
- ・モルッカ諸島（アンボイナ）を巡るオランダとの戦争に敗れたイギリスは、東南アジアから撤退した。
- ・台湾を占領したオランダは、台湾に寄港する日本船に税金をかけようとしたが、日本船はそれを拒否し続けた。その結果、両国の国交が一時的に断絶した。



オランダは、他のヨーロッパ諸国との戦いに勝利して台湾を占領すると、そこに寄港する日本船に対して課税を始めた。日本船がそれを拒否し続けた結果、オランダと日本の関係は悪化した。

= 新たに獲得した知識及び技能②

これらの資料の考察によって獲得した 2 つの知識と大航海時代の学習で獲得した既習の知識を活用して考察した結果、生徒は次の結論を出した。

#### 《既習の知識及び技能》（大航海時代）

ヨーロッパでの香辛料の爆発的な人気  
が、ヨーロッパ商人のアジア進出への  
意欲をかき立てた。

#### 《新たに獲得した知識及び技能①》

17 世紀に多くの日本人が東南アジアの広  
範囲に進出し、活発に貿易を行っていた。

#### 《新たに獲得した知識及び技能②》

オランダは、他のヨーロッパ諸国との  
戦いに勝利して台湾を占領すると、そ  
こに寄港する日本船に対して課税を始  
めた。日本船がそれを拒否し続けた結  
果、オランダと日本の関係は悪化した。

#### 《思考・判断・表現①》

- ・オランダは、香辛料を手に入れるために、モル  
ッカ諸島や台湾を占領した可能性が高い。
- ・オランダが、台湾に寄港する日本の貿易船に税  
金をかけようとしたことから、オランダは台湾  
に日本船を寄港させたくなかった可能性が高  
い。
- ・日本船は、税金を納めたくないのであれば、台  
湾に寄港しなければよい。オランダの課税に抵  
抗し続けるのは、これまでのように台湾に自由  
に寄港したかったからではないか。

日本人の海外渡航、帰国の禁止令が出される直  
前、オランダは台湾で日本と対立していた。

生徒は、日本人の海外渡航、帰国の禁止令が出される直前、東南アジアでオランダと日本が対立をしていることを明らかにしたが、その原因は、オランダが台湾に寄港する日本船に対して課税を始めたことにあるのではないかと考えた。しかしこのことで重要なのは、「もしも日本船を寄港させなかったのであればそれはなぜか」「どうして日本船はオランダに寄港しなかったのか」ということである。これらの疑問を一つひとつ丁寧に解決していくことで、オランダが日本と対立した理由がより詳しく明らかになってくる。そこで、授業者は、生徒に次の問いを投げかけた。

《生徒の思考を広げる（深める）ための働きかけ》

① 「台湾に寄港した日本船は、どこからやってきたのか。」  
→ 日本から 東南アジア各地の日本町を経由して

② 「台湾に寄港した日本船はその後どこへ行くのか。」  
→ 日本へ、東南アジアの別の日本町へ

③ 「日本船が台湾に寄港する目的は何か。」  
→ 台湾には日本人居住地がある。日本船が東南アジア各地で入手した商品を台湾で売ろうとしていたのかもしれない。  
→ 台湾に住む日本人がそこで買い付けた商品を、日本の貿易船に積み込み、日本に運ぼうとしていたのかもしれない。

④ 「もしこのまま日本船の台湾への寄港を許すと、オランダにとってどのようなデメリットがあったのだろうか。」  
→ 台湾の商品を、日本に買い占められてしまう可能性がある。  
→ 日本人が貿易により儲けを増やし、オランダに利益が入らなくなってしまう。  
→ 日本が台湾を占領してしまいかねない。

これらの問いの考察により明らかにした内容を整理していく中で、最終的に生徒は次の結論を出した。

⑤ 「オランダがほしかったのは台湾やモルッカ諸島だけか。」  
→ 日本町があるインドシナ半島やマレー半島など東南アジア全てを手に入れたい。

《思考・判断・表現②》  
東南アジア各地に拠点をつくり貿易をしていた日本人を、オランダは快く思っていなかった可能性が高い。  
= **新たに獲得した知識及び技能③**

## (2) 日本人の海外渡航、帰国の禁止令の意義をオランダの立場から考察する段階

指導案の学習過程の中心発問Ⅱ「日本人の海外渡航、帰国の禁止はオランダにとって、どのようなメリットがあったのか」に対して、生徒は次のように考察した。

《新たに獲得した知識及び技能③》  
東南アジア各地に拠点をつくり貿易をしていた日本人を、オランダは快く思っていなかった可能性が高い。

《新たに獲得した知識及び技能④》  
1635年に江戸幕府が日本人の海外渡航、帰国を禁止した結果、日本人は貿易をできなくなった。

《思考・判断・表現③》  
日本人の海外渡航、帰国の禁止令により、日本人が貿易から手を引いたことで、オランダは日本と戦わずして東南アジア貿易を独占した。

ここで注目すべきは、「東南アジア貿易」である。生徒は、この「東南アジア貿易」とは、「東南アジアとオランダ（ヨーロッパ）間での行われた香辛料貿易」であると考えた。確かに16世紀末にオランダが東南アジアに進出した目的は、スペインやポルトガルによって独占された東南アジアの香辛料を奪い取り、それを自国（ヨーロッパ）に輸出することであった。それは、禁令が出された後も行われていた。しかし、オランダは、次第に、対ヨーロッパ貿易よりも利益が得られるアジア域内での中継貿易に重点を置くようになっていた。本時では、このことを明らかにする必要がある。そこで行ったのが次の資料の考察である。

### 《資料3》オランダ商館の分布

#### 《読み取ることができる内容》

- ・ 東南アジアのバダビア、バンデン、ティモール、アンボイナ、シヤムに商館がある。
- ・ 南アジアのセイロン、ベンガルに商館がある。
- ・ 日本（長崎）に商館がある。



17世紀、オランダはアジア各地に貿易の拠点である商館を置いていた。

= 新たに獲得した知識及び技能⑤

### 《資料4》オランダがアジア域内で行った中継貿易の構造図

#### 《読み取ることができる内容》

- ・ オランダはインドで綿織物入手し、東南アジア（インドネシア）で売りさばいた。
- ・ 東南アジア（インドネシア）では、中国商人から生糸入手した。
- ・ 中国商人から入手した生糸を日本で売りさばき、銀入手した。



オランダは、日本で獲得した銀を元手にアジアの広範囲で中継貿易を行った。

= 新たに獲得した知識及び技能⑥

資料の考察により新たに獲得した2つの知識を活用して、考察した結果、最終的に生徒は次の結論を出した。

#### 《新たに獲得した知識及び技能⑤》

17世紀、オランダはアジア各地に貿易の拠点である商館を置いていた。

#### 《新たに獲得した知識及び技能⑥》

オランダは、日本で獲得した銀を元手にアジアの広範囲で中継貿易を行った。



#### 《思考・判断・表現④》

日本人の海外渡航、帰国の禁止令により、日本は貿易ができなくなった。この結果オランダはアジア各地での中継貿易を独占することに成功した。

## 2 評価

授業終了後、行った評価テストの問題は次の通りである。

<b>【問題】</b>	<b>日本人の海外渡航、帰国が禁止されたことの意義を説明しなさい。</b>
-------------	---------------------------------------

### (1) 観点別評価の基準

3つの観点別評価の具体的な基準は次のようになる。これらの基準を全て達成している場合には、「A」、そうではない場合は「B」または、「C」となる。

観点	評価の基準	関連する観点
知識及び技能	<ul style="list-style-type: none"> <li>17世紀に東南アジア各地に日本町が建設されるほど多くの日本人が東南アジアに進出して、貿易を行っていた。</li> <li>17世紀の東南アジアではスペイン、ポルトガル、イギリス、オランダがこの地域での貿易の覇権を巡って、軍事衝突を繰り返していた。</li> <li>もし、オランダと日本が対立していたとすれば、オランダは、日本人が東南アジア各地で貿易することを快く思っていなかった。</li> </ul>	思考・判断・表現
思考力・判断力・表現力等	<ul style="list-style-type: none"> <li>説得力のある説明になっている。</li> <li>日本人の海外渡航、帰国が禁止される直前の東南アジアでは、オランダと日本が、軍事衝突をするか否かの状況にまで達していた可能性が高かった。</li> <li>日本人の海外渡航、帰国が禁止されたことで、オランダは、日本と軍事衝突をせずして、東南アジア、さらにはアジアの中継貿易の独占に成功した。</li> <li>日本人の海外渡航、帰国が禁止されたことで、日本の経済発展は大きく遅れをとることになった。</li> </ul>	主体的に学習に向かう態度 知識・技能
主体的に学習に向かう力	<ul style="list-style-type: none"> <li>解答として一通りまとまった文章になっている。</li> <li>日本人の海外渡航、帰国の禁止がなぜこのタイミングで行われたかということを明らかにしている。</li> <li>日本人の海外渡航、帰国の禁止の意義を、オランダの立場から説明している。</li> <li>既習事項を正確に思考に生かしている。</li> </ul>	思考・判断・表現 思考・判断・表現 思考・判断・表現 知識・技能

## (2) 実際の生徒の解答

### 【A評価の解答】

17世紀、オランダはスペイン、ポルトガル、イギリス、日本と、東南アジアの貿易を巡って対立していたが、オランダは、戦争によって他のヨーロッパ諸国の拠点を次々と占領した。そして残るライバルは日本だけとなった。当時東南アジアには多くの日本人が進出し、各地に日本町をつくってさかんに貿易を行っていた。オランダはこのことを良く思っていなかった。1620年代に、オランダが台湾に寄港する日本船から税金を取ろうとしたことで、オランダと日本の対立は深まり、一時両国は国交を断絶した。このような状況でオランダが幕府に働きかけて出されたのが日本人の海外渡航、帰国の禁止令であった。日本人の海外渡航、帰国が禁止になったことで、オランダは日本と戦争することなく、東南アジア貿易を独占することに成功した。そして、東南アジア、南アジア、東アジアの広い範囲で中継貿易を行うことができるようになった。日本は貿易による利益を失い、日本町は衰退した。そしてヨーロッパと比べて経済発展に遅れを取るようになった。

### 【B評価の解答①】

オランダの軍事力はものすごく強く、スペインやポルトガル、イギリスとの戦いに勝利し、モルッカ諸島や台湾を占領した。またオランダは、ルソンを出航した日本の貿易船を捕まえたり、台湾に寄港する日本の貿易船に税金をかけたりにして、日本が東南アジアで貿易をすることができないようにしていた。この頃、東南アジアにはたくさんの日本人が移り住み、貿易をしてお金を稼いでいたため、オランダはこれを何とかやめさせたかった。しかし、日本人の海外渡航、帰国の禁止令が出たことで、日本人は貿易ができなくなった。そして、オランダは東南アジアの貿易を自分のものにすることができた。

### 【B評価とする主たる要因】

- ・オランダがスペイン、ポルトガル、イギリスと対立していたことは説明しているが、その要因についての説明（東南アジア貿易の覇権争い）が十分でない。
- ・日本人の海外渡航、帰国の禁止令によりオランダが東南アジア貿易の独占に成功したことは説明しているが、その際日本との軍事衝突を伴わなかったことを説明していない。
- ・日本人の海外渡航、帰国の禁止令により、日本は他のヨーロッパ諸国と比べて経済発展に遅れをとったことを説明していない。

**【B評価の解答②】**

この頃オランダが東南アジアに進出し、勢力を強めていた。そしてスペインやイギリス、ポルトガルなどの、東南アジアで貿易をしていた国々を、この地域から排除していた。またオランダは、東南アジアのいろいろな地域と貿易をしていた日本のことを快く思っていなかった。そこでオランダは、占領していた台湾に要塞を築き、日本へ向かう貿易船を取り押さえたり、税金を掛けたりした。そして、日本人の海外渡航、帰国の禁止令が出された。この命令によって、オランダは東南アジアとの貿易を独占することができた。また日本にとっては、結果的にキリスト教の布教を抑えることにつながった。

**【B評価とする主たる要因】**

- ・日本とオランダの対立について、それに関する具体的な出来事の説明に終始している。
- ・日本人の海外渡航、帰国の禁止令によりオランダが東南アジア貿易の独占に成功したことは説明しているが、その際、軍事衝突を伴わなかったことを説明していない。
- ・日本人の海外渡航、帰国の禁止令により、日本は他のヨーロッパ諸国と比べて経済発展に遅れをとったという日本にとってのデメリットを説明していない。

**【C評価の解答】**

オランダは東南アジアでスペインやポルトガル、イギリスと戦争してモルッカ諸島や台湾を占領した。そして台湾に寄港する日本船から税金を取ろうとしたことで、日本と対立した。しかし、日本人の海外渡航や帰国の禁止令が出されたことで、日本は貿易ができなくなった。この結果、オランダは他の国に邪魔されることなく、東南アジアで貿易をすることができるようになった。日本人の海外渡航、帰国の禁止令はオランダにとって意義のあるものであった。

**【C評価とする主たる要因】**

- ・日本人の海外渡航、帰国の禁止令が出される直前の東南アジア情勢について、具体的な出来事は挙げているが、オランダが他のヨーロッパ諸国と対立した要因を十分説明していない。
- ・日本人の海外渡航、帰国の禁止により、オランダは日本との軍事衝突を回避できたことについて説明していない。
- ・日本人の海外渡航、帰国の禁止令により、日本は他のヨーロッパ諸国と比べて経済発展に遅れをとったという日本にとってのデメリットを説明していない。